

「音読の実際」の巻

高梨庸雄 Takanashi Tsuneo
(京都ノートルダム女子大学教授)

今回は音読に関する導入として、音読は文字によるコミュニケーションよりはるか昔から存在し、言語習得の面でも重要であるが、現在の英語教育においては、必ずしも効果的に行われているとは言い難いことを述べた。今回は、具体的に教科書の文章を例に音読の重要なポイントを考えてみよう。

The Sudan is a large country in northeast Africa. It is a country with great promise. But it also has great problems. Its people have suffered from war and hunger.

In 1993 Kevin Carter went there to work as a photographer. He wanted the world to know the facts.
(NEW CROWN ENGLISH SERIES BOOK 3, LESSON 7, 三省堂)

1 基本事項

ここでは音読を始めるに当たっての基礎・基本を中心に述べることにしよう。

1.1 内容語と機能語

単語には大別して内容語 (content words) と機能語 (function words) の2種類があり、内容語はそれ自体、内容を表現できる名詞、動詞、形容詞などで、通常、強勢 (stress) があるが、前置詞、接続詞などの機能語には特別な場合を除き強勢はない。特別な場合とは対照 (contrast) や強調のためか、あるいは文末にくる場合などである (基本事項 1.4 にその一例を挙げてある)。

The Sudán is a largé cǒuntry in northeást África.

強勢は厳密に言えば音節 (例: country には coun-try と2つの音節がある) にあるのだが、音節では母音が中心になるのが普通なので、強勢符号を便宜的に母音字の上に置くことが多い。

1.2 話者の気持ちとイントネーション

文のイントネーションは、その文の強勢のある最後の単語のところで変化する。しかし、これはあくまでも原則で、強勢やイントネーションでは、話し手にとって特別な意図や感情を表すことが多いので、個人差も出てくる。その例として次の文を考えてみよう。

I love you. これは一般的なイントネーションで、「私があなたを愛しているということをあなたにわかってもらいたい」場合である。

I love you. これは「私が愛しているのはあなたであって他の女性 (あるいは男性) ではない」ということである。

I love you. この場合は、「あなたを愛しているのは私であって、彼 (あるいは彼女) ではない」という意味になる。

1.3 日英リズムの相違

英文のリズムは強勢のある音節と強勢のない音節で構成される。英国の詩人ワーズワースの詩の1行に I wandered lonely as a cloud. というのがある。イタリック体の部分が強勢のある音節である。つまり、弱強のリズム単位が4回現れる。このように英語の定型詩には強勢のある音節と強勢のない音節 (その数の組み合わせはいろいろある) が繰り返されることによってリズムができる。会話文や散文の場合には定型詩ほど規則正しく現れるわけではないが、強弱のリズムが基本になっていることには変わりない。

① *The Sudan is a large country in northeast Africa.*

② *It is a country with great promise.*

上の2文でイタリック体の部分は、普通、強勢

を受けない部分である。その中で①の is a, ②の It is a を例に考えてみよう。俳句に親しむ日本人の音韻感覚からすると、It is aの方が1語多い分だけ読むのも長くかかると思うかも知れない。しかし、強勢のない音節が続いても一気に読むのが英語のリズムであるから、音読する時の長さはほとんど同じである。

しかし、日本語のリズムは(短)音節(mora)のアクセントが高いか低いかによって決まる高低のリズムであり、「旅に病んで夢は枯野をかけめぐる」という芭蕉の俳句を音読するとき、1音1音ほぼ同じ長さで読む。英語のように連続する弱音節を一気に読むことはない。

1.4 機能語が強勢を受けるとき

ここでは機能語が強勢を受ける場合を見てみよう。

I'm from Japan. Where are you *from*?

Are you *for* or against the plan? (あなたはその計画に賛成か反対か)

上の例のほかにも機能語が強勢を受ける例はいろいろあるが、辞書を引いても強勢符号は付いていないことからわかるように、強勢なしで用いられる場合が機能語の普通の用法であるから、逆に言うと、強勢があるのは特別な場合なのだ、と考えた方がよい。

2 発展事項

2.1 書き手の気持ちになって読む

上記のような音声学の基本的知識は最小限必要であるが、もっと大事なことは、語句や文で表現されている内容に作者はどんな思いを込めているのだろうかを考えて、それが聞き手に伝わるように音読することである。比喩的になるが、書いた人の思いを自分の思いとして聞く人に伝えるには、どこを強調し、どこを静かに読むかを考えることである。冒頭に引用した3年7課 A Vulture and a Child の文章には、It is a country with great promise. But it also has great problems. と述べられている。promise と problems という、いわば発展途上国の共通の問題が取り上げられている。その対照をはっきりと伝えることが大切である。そのためには、Its people have suffered from war and hunger. という文を、

内戦からくる飢饉に苦しむスーダンの人々の気持ちを自分の気持ちとして読むことが必要である。

2.2 つなぎの段落

段落と段落のつなぎ役となる段落がある。英語では Transitional paragraph と言って、文字通り「移行」の段落で、In 1993 Kevin Carter went there to work as a photographer. He wanted the world to know the facts. は次ページの最初の段落へ移行するための「つなぎ」の役割を果たしている。したがって音読では、ナレーターとして淡々と読むのがよい。

2.3 情景を目に浮かべることができるように読む

One day he saw a child. She was lying on the ground. He knew why she was there: hunger. Suddenly a vulture appeared. He pressed the shutter. This is the photo.

この6つの文は、映画の連続シーンのように、1カットずつ目に浮かべることができる。音読ではこれをどう読み方に反映させるかが鍵となる。最初の3文は末尾のピリオドに心持ち長めのポーズを置いて、聞き手が「次に何が起こるのだろうか」とサスペンス(suspense)を持って聞くように、1文ずつクリアカットに読んでいく。Suddenly a vulture appeared. He pressed the shutter. はこの段落のヤマであり、2文の間のポーズは非常に短く読み、一息おいて、ゆっくりと This is the photo. と読み終える。

3 音読と Listening

ヒアリング、リスニングと仮名で書く場合、同じ意味で使っている人もいるが、英語でいう Hearing, Listening には根本的な違いがある。前者は聴覚に異常がない限り、生まれつき備わっているのに対し、後者は習得(acquire)しなければならないものである。母語の場合、乳幼児の言語中枢は Listening を通して母語の音韻、統語、語彙を習得すべく活発に働いている。外国語の場合、それを習得しようとするならば、時に母語からの干渉に悩まされながら必死になって Listening をする必要がある。テープやCDもいいが、できれば教師の肉声で音読してあげたい。